

啓蒙知惠乃環天

福岡第一師範學校
(學校圖書)

登錄 番	第	號
	門	
	部	
記	款	項
	目	次
全	冊 / 內第	冊
分類 番	第	號
	460.8	

024387

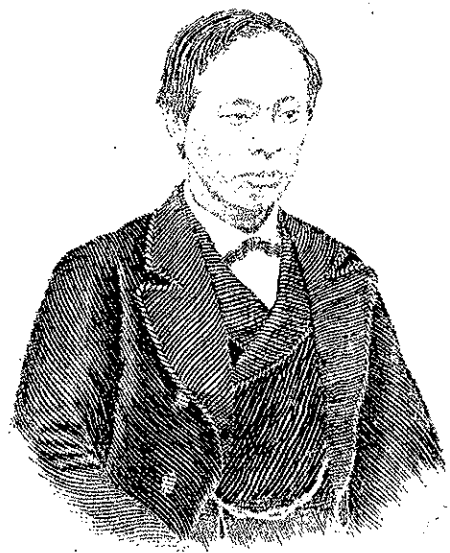
T1A1
40
U 89

於菟子譯述

啓蒙
智慧之環

瓜生氏藏

瓜生先生之像



題首



余屬官文部与瓜生君
為同僚日与議學制余
目不識洋字每有考西
歐法國之制必積之者

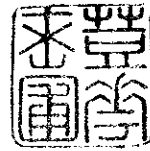
君間出示其所謂述啓
蒙智德環方是爲小學
生徒宜讀者支那之書
迂濶而實際其文難明
我邦人所譯洋書文義

多歧晦澀不明了是書又
至近理至要尤爲今必
用因急從速刻之以惠
天下小學生徒始開知
發蒙之功豈止小學生

後身也哉

明治壬申三月文部少丞

撰并書



啓蒙知恵の環卷の一

於菟子

譯述

第一篇 總論

第一課 物の論

一團の石、一部の書、一株の木、一羽の雀、一匹の馬、一本の針、一片の葉、一張の椅子、一點の星、一種の冠等の如きと云ふ人の目には能く見ゆるものにて之と名づけて物といふ其中に椅子、針、書、冠等のものは人の作るやと云ふを能く之と人爲の物といひ、木、雀、馬、葉、星等ハ人の作る所ならずは乃ち

天地の自然より出て天神の造り王へるところなりと云ふと天造の物と名づ

第二課

天造の物及び生物の論

凡そ天の造せる物の中を生ある物と生なき物との別あり馬雀木の類は生あるものより之を生物といひ星石の類は生なき物より之を



第三課

人類の論

人類は天造中の生ある物より最も勝る貴きものなり故に万物の靈とも申はなり形体はより靈魂あり形体は生より生長して大人となり嬰兒より次第より長じて十歳前後は幼童といひ二十歳より成人といふ但身体の長大は極る處あり心智の小より大となるに至つては能く進んで遵養するを致す極るところなり事と曉る事と辨へ物を愛する杯は皆を魂の所なる故なり

且人の能是非と分別する事を得る物より諸物
小超えて其行ふ所の事皆必ず神明の照覧する
所なり此言ハ我
皇國よても上古開闢の始めより於て早く教へ示
し玉へり古記祝詞等よて考へ合ふべし

第二篇 身体論

第四課 首の論

人の身ハ百体ありて其最も重なるものハ首
よりて次ハ腹背次ハ手足なり首ハ總身の上
ありて頭と額の二箇より成る頂額後頭額額の

類ハ皆な頭の内よりて内ハ脳髓なり外ハ蓋なり
髪なり以て之と守護を頭の前ハ即ち額なり

第五課 顔の論

顔の内よりて眉を眉なり目なり頬なり鼻
なり唇なり額なり眼ハよく見る瞼ありて開閉
鼻ハよく嗅ぐ内ハ兩孔あり鼻の孔といふ唇ハ
言ハ食ふ為の用なり此物よりて屈撓易く
故ニ齒牙ありて内より支へ以て内ハ落込ぬや
うなる方なり

第六課 胴の論

人の身の最も大なる處と胴とつゝ其部位と分ちてつゝとハ肩胸兩脅腹背腰ハ胴の上部と胸とつゝ胸の兩旁と脇とつゝ脇骨ハ胸と背の二骨と相つゝ胸の内ハ心と肺との臓あり其下部ハ即ち腹なり腰なり

第七課 上肢の論

身の上肢と分て云ハ腕といひ腕といひ手といひ指とつゝ腕ハ肩を以て腕と連なり腕ハ肘と連なり手ハ手首と腕と連なり指ハ手節と手とつゝ人ハ兩腕兩肘兩手十指

あり手の内と掌といひ手と捲と拳といふ

第八課 下肢の論

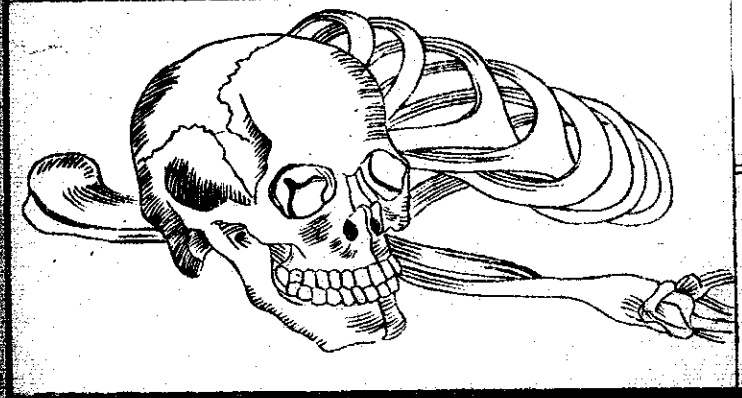
身の下肢と腿あり脚あり足あり趾あり腿ハ腰と連なり脚ハ腿とつゝなり足ハ脚とつゝなり趾ハ足と連なり人ハ兩腿兩脚兩足十趾あり足の後と踵といひ足の上と趺といひ足の下と蹠といふ

第九課 骨節の論

人身の部位とよく活動するものあり其動處ハ乃ち骨の節あり肩臂手頸髀較膝頭脚跟の

如き々々な節あり之と身内
の大節とを手の指足の趾杯
も小き骨節甚た多し脊骨
のよく屈と能伸る骨節相
連なりて一本の胴骨となと
み由る頭の動くつ乃ち脊骨
の上なる兩節の工合によ
るなり

第十課 筋骨等の論
骨の最も緊要あるものと乃



ち脳蓋顎骨胸骨鉄盆骨脊骨肋骨膈骨子骨腿骨
脚骨足骨等なり身内の骨おのゝ其所にありて
位置と失ふぬい筋と腱とつゝ物のなりて之と
保持する故に由る筋と々乃ち赤肉の事なり腱
とい筋の端よりてよく骨に固着してあり

第十一課 心肺二臓の論

血は心の臓より出て動脈管より一身に周回
運行し其後静脈管より帰りて心の臓に入る
其ときききく紫色に変わる心臓に入る
肺の臓を経て鼻口より吸ふところの空氣

を得て復清くなりて持まつの赤色より一りあ
ふ出るゝ重ねる心の臓よりまゝ周身は循環
して暫も止むときな

第十二課 飲食休息の論

凡そ人々飢ゆるるときは食へて渴くときは飲む食
は飽き飲で足まば乃ち止む起て事と致め身勞
れ倦めば則ち休息ふ眼瞤る時を則ち瞞り足
も則ち覺む其時精神をさそやうなり毎日
この如くふて又循環してゆまざるなり

第十三課 身内の切用の論

人の命を養ふものの臓腑の切用なり肝肺はよ
く食物を消化し其内よき物を漸く混融して血
となり其用なきものを大腸よりおろし出でて
屎となる既ち血と成りたる時を心の臓より週
身は運し是れ心の臓の用なり肺の臓は空氣
を呼吸する機運あり心肺の切用を日夜止む
て寐ても寤ても同トきとなり少くもて虧け
損する時を病となし絶ゆれば死するあり

第十四課 身外の動作の論

人身の百体其うち一なり能く操りよく

持ちよく打ちよく牽きよく行きよく走りよく
 飛びよく躍りよく立ちよく坐しよく臥し。又よ
 く見よく聴よく嗅ぎよく味ひよく感よく笑
 ひよく嘆きよく泣きよく叫びよく唱ふ而して
 手の用となすい最も多し

第十五課 人の齡の論

人生きて初年と嬰孩といひ能く歩よく語言
 せざるを小兒といひ。さづかう顧みて料簡あるを
 幼年といひ身むて十分生長たるを成人の
 時と力衰へ手足弱きに至りては則ち之を老

年といふなり

第三篇 飲食の論

第十六課 肉食の論

身を康健に保たんとすハ飲食
 食を第一なれ人の食物は
 宜しきもの甚だ多し中よ就
 て獸肉と鼠をよくと牛子
 牛羊子羊豚の肉を第一と
 盛山羊兎等の肉を亦と食ふ
 べし又ハ肉ハ煎じて羹汁と



もなまべー

第十七課 其二

鳥類と魚類ふも亦食をへきもの多くて本邦ハ魚と食するも最も多し水土地勢のあらうむるゆゑなるべし鳥類の中ふては鶏家鴨七面鳥鴿雉山雞鷺鴿の類其外尚多し水族のうちハ鯛鯉松魚鯖比良自鯉鯽鮭鱒等も食すべし介類よくは蟹蝦蛤蛸蛭蛻又魚鱸の肉も食ふべし

第十八課 野菜の論

蔬菜も亦た食となまべし其菜と食するものあり菜の如きは是なり其莖と食するものハ路獨活の如きは是なり其根と食するものハ大根芋蘿蔔蓮根烏芋牛蒡の如きは是なり其子と食するものハ豆の類是なり其葉と食するものハ瓜の類是なり又其蕾と食ふあり花菜の類是なり

第十九課 穀物の論

穀類の食小供も亦た多し米麥牟麥粟芋ハ其最なる者なり米ハ本邦勝てよく出来日々食とせるものなり諸穀ともは皆を挽きて粉

となり其細なる所を篩ひ取れて糕餅、蒸餅、點心と作り其粗き皮ハ家畜を養ふに用ふ、荳、小豆、腐を作り麥と救ふて改醬を作り、と殊に夥しと

第二十課 菓物の論

食ふべき菓類甚に多し、橘、柑、梅、柿、桃、李、梨、林檎等よりて粒々と殊をなすものハ葡萄、覆盆子、の類是なり、肉の内より絞るものハ梅、桃、の類なり、穀の内より肉を藏するものハ杏仁、银杏、胡桃、栗の如きなり、人の納し乾し貯ふるものハ柿、無花果、葡萄

葡萄、榲桲等の類なり、梅、橙、大、林、檎、梨、柿、と殊に有用の菓よりて諸方より多くあるものあり

第二十一課 味と調ふる品の論

食物のうち小淡きものハ塩と以て味と調ふ又砂糖、蜜糖、蜜と以て甜とせざるもあり或ハ酢、醬、薑、芥粉、胡椒等と用ひて物の味と調ふるもあり肉、荳、葱、丁子、荳蔻、花、山、椒、肉、桂、胡椒等ハ名づけず香料とす、多くハ熱地の國より来るなり

第二十二課 食の論

人の食となすハ飢と救ひ身を養ふ為なり其始

め齒ふて嚼み然る後之を吞むをきり胃に入
りて漸く消化し其津汁を血となりて以て生を
養ひ全身の力を加ふるなり食物ハ生よて食ふ
よりも煮て食ふこそ更に益を為とも知
且つ食ハ足らざるふよ一過て飽ハ宜き所よし
なり

第二十三課 飲もの論

人ハ飲ものを以て渴をとむ飲をきりハ水
茶乳加非酒麥酒葡萄酒林檎酒梨子酒其外諸々
の酒の類ありてその至つて好まざるものハ水
の茶加非ハ其次なり乳ハ牛の乳と羊乳の
よりて其味をなすと宜しく極めて人の養とな
る米麥葡萄酒林檎梨子等の酒を皆よく入を酔ハ
しむ都て焼酎の類ハ酔く人を害するものなり

第二十四課 農夫の論

農を四民の一にして人の食するもの多しハ農
の作り出を所なり毎日食するものと云ふの穀類ハ
之ハ其種植たる處よりて之を獲収る迄ハ田
地を犁いて土塊を肥し糞を入れて種を播く等
の事を勤めて其間の勞苦ハ勿論種々の巧を尽

若干の費をりけて培養を
れを去る其功を成さるのな
りけき大ふ農業を為さるの
ハ多く傭人を僱ふ既ハ収め
取りて穀物となれば之を市
に出して賣るなり

第二十五課 其二

農家又ハ牲口を畜ふ馬ハ犁
耙を挽き重荷を負ひ車を挽
く為なり牡牛ハ亦挽負の事



よつゝふよつゝもけきと多くハ羊豚豚と同様ハ賣
物とせるなり牝牛ハ乳を取る其乳よて白牛酪
と干牛酪とを製さる一雞鵲の類ハ卵をとり又
料理して食する為なり

第二十六課 食物を備辨するの論

食物を問より百姓ハ由て出来くハ其のなれど
も百姓より直ハ得るハ何れも又必ず食物を
備辨するの手の経るものと何れもハ椿屋あり
て米と麦ハ水車屋ありて粉と造り蒸餅屋
りて蒸餅とつくり素麵屋りて麵類をつくり

屠戸ハ肉類と賣リ乳屋ハ乳を絞リて之を賣リ
八百屋ハ蔬菜と賣リ捌き酒造と我等の爲ニ酒
類を備ふ

第二十七課 其二

食物を備辨するものと多く力を勞して營むことを
々々米屋の米を搗き酒屋の酒を醸し水車屋
の粉を挽く等の如く其外賣出し買取等は奔走
するものも少なうべし雜貨諸物を轉賣する問
屋の米茶砂糖菓物香料等を賣捌くものも又食
物によりては遠邦に出づるものも少なうべし
ケ様なる物ハ舟車の運漕とたのみ若干の危嶮
勞苦を歴る始るより人々の飲食に給するを
得るなり

第四篇 服飾の論

第二十八課 男人の服飾の論

人の身体ハ必ズ衣服を着る被る人を要す冬
月を暖るなる物を服し夏天ハ輕衫を着る地方
の熱きと云ふを麻を用ひ寒きと云ふより皮
革の服を被る男子の服ハ帽子帶下着上着長着
襦袢襟胴着腰納股引脚半足袋靴長靴等の品々

あり

第二十九課

婦人の服飾の論

婦人の服は、そのハ被髪、紐袖、廣手細襦袢、腰衾、腰衣、股引、脚半足紐、足袋等、猶多くあり。其飾ハ簪、耳環、鳳冠、腕環、足環の類なり。本邦もては男女とも衣服の作り方、畧相同じ。西洋もては其殊なり。と甚し。

第三十課

衣服に用ゆる品の論

衣服を製するの料多くハ、絲、麻、羊毛、皮革、棉花、を用ふ。棉ハ、印土、亞弗利加、亞墨利加、も多く生じ、麻

ハ、比利時、阿爾蘭、魯西亞等の國に生じ、本邦にも綿麻を産する。と多し。唯外國へ賣出を程よと至らぬのみ。羊毛ハ、羊より剪取るより、絲ハ、本邦の名産より、て蚕の吐き出さる。と近來發賣して外國へも輸出さる。との少々、右の諸品を用ひて種々の織物を作る。



第三十二課 衣を製する人手の論

衣服を製するは、追ふと本より多くの人工を經るなり。今婦人の仕事は衣を製するの布帛を用ひるも其布帛を蚕桑して絲を繰り又綿花を摘みて縷を成し機杼を以て織りなり。裁縫するふりくりても又鉸剪懸針縫針等を用ひ其品々ハ皆な夫々の職人の手ふ成るなり。鞋匠の革を用ふるを獸皮先づ皮匠の手を経て毛を去り揉て革とし韋としてそきより始めて靴を用ゆるを得るなり。

第三十二課 身を潔くすべきの論

若し身の康健あるを欲するなりをも必す常身身を清くすべきなり。不潔ハ病を生むる本なり。人のみな毎日浴して乾きたる海綿又ハ手拭にてよく体を磨り肌着と体の蒸發氣を吸込むものゆゑ志むく之を取り換へて居室ハよく洒掃して空氣を通すべし。

第五篇 居所の論

第三十三課 房屋の論

人の居る所と云ひたり。天幕なり。廬なり。屋あり。多

くハ皆屋いへに居ゐるなり屋いへの小なるを舎やといひ高
く廣ひろきものを邸第たちといふ屋いへの内うちを分わちて内室うちむろ
外堂げだう玄關げんかん客廳かく廳へい書房しやうぼう厨く所しよ地窖ぢがう等らうといふ廊下らうか梯すい等らう
りりて上下うへさへ左右さゆうに相通あひある

第三十四課 屋いへを建たてる材木かふ類るいの論

木き石いし鍊れん化か石いし瓦わ石いし板ばん石いし灰かい鐵てつ銅どう鉛えん硝しょう子しをを屋いへを構か
へるの諸材しよざいあり木きと樹林じゆりんより出いて石いしと石いし板ばんと
石いし礦かうより出いて鍊れん化か石いしと瓦わハ粘ね土どよて造つくり鉄てつ鉛えん
杯はいハ金礦きんかうより出いて石いし灰かいハもと石いしを燬やき或あるは蠟ろう
殼がくを燒やてつくり玻璃はりと硝子屋しょうしやよて作つくるなり

第三十五課 人ひとの業わざの論

人ひとの世よに居ゐるや互たひに身みの勞ろうを分わち合あふて彼か此こ
相資あひあるを常じょうとす故ゆゑハ食物じきぶつを作つくるものあり衣服いふく
を製せいするものあり器械きかくを造つくるものあり銅どう匠しやうハ
銅どうを以もつて燭臺燈しやくたいとう錐し子し等らうをつくり陶工たうこうハ坭どろを以もつて
て杯はい碗わん碟てつ等らうの陶器たうきをつくり鍛冶かやハ鋼こう鍊れんを以もつて
種々しゆしゆの刀剪たうせんをつくるの類るいを相須あひまつ互たひに生養せいやう
の用ようをなすなり

第三十六課 屋いへを建たてるふ入用いりようなる職業しやくぎ

の論

家屋を造るは入用の職業数々あり其習ふところの業各々同ト一にといへども皆相須て其事をなさざるをなし石泥匠ハ煉化石を以て牆を作し石匠ハ石を築合せ木匠ハ屋根を構ひ床を作り屋根師ハ板石板瓦を以て屋根を葺き張物師ハ紙を以て張貼をなし玻璃匠ハ硝子を窓扇に嵌め泥匠ハ石灰を以て牆及び天井を塗り油漆匠をききくの木村ハ漆を塗る

第三十七課 家什を作る者の論

家内の什物も亦多くの職人の手にて作るなり

差物師ハ棹机椅子牀簀笥寫字檯等の物をつくり鍛冶屋ハ種々の鉄器をつくり錫匠ハ諸般の錫器をつくり其外帳棚簾疊席羅襪等のものつくるまで専ら其業を習ふものありて用を便するなり

第三十八課 受負人の論

家屋を建てる營築の事を受負ひて承接するものを受負人又ハ差配方といひ又棟梁といふ其人より石匠泥水匠木匠及び諸件の工匠を僱ひ集めて夫々の事業を都合し家屋を造立して居

住を全備せむ

第六篇 教育の論

第三十九課 學校の論

書を讀み字を寫し第一有用の術なり少年の時
を尤も學びやせしむ是故に人の父母たるもの
のハ兒女を育つるに必ち學校を送りて誦讀書
字等の事を習はしむ學の道ハよく氣を附くる
とよく強忍するものニ貴ぶ故に弟子ハ必ち
勉強を第一とし師匠ハ嚴かなるをよしとす故
に學生も宜し從順して之を習ふべし

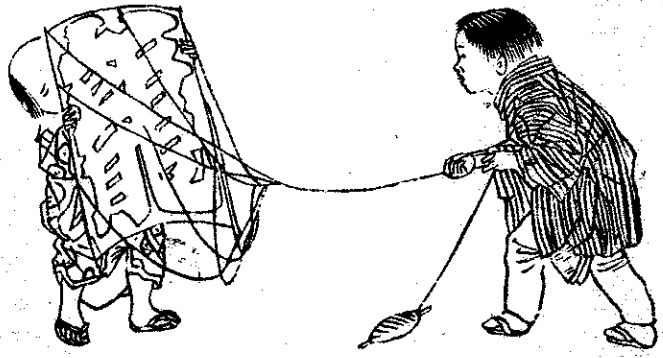
第四十課 學問の論

學問を成さんとするに必ち骨を折るべし
書を讀まんとなしハ慢声にして度々溫習を
要せし手習ふも多し寫して心を盡さく
しよく悟らんとするに聞ころと讀むころの
事ハ宜し考へを凝らす算數を學ぶハ書を
よく字を習ふよりも難し然れども甚と用をな
さんと多し必ち習ふをなす事なり此事遂に
ぬきしものと思ふべきは力を盡す時と世に能
むざる者ハなきあり

第四十一課 童子玩耍

學問の論

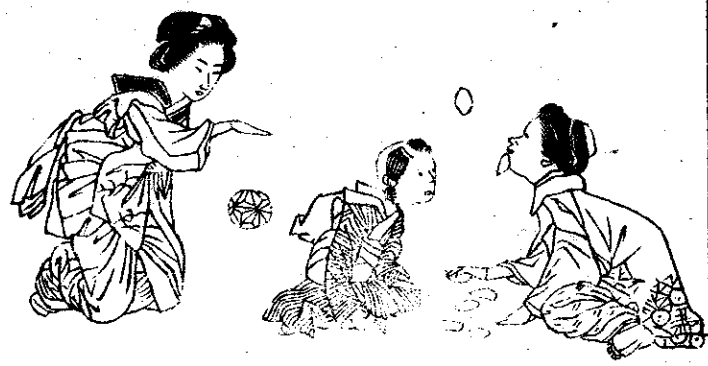
學校にありて學問する者ハ
 放學玩耍の時あるべし其
 あそびは打毬捉山鶏秋千抽
 陀螺盲公捉啞姥猛獸取蛇子
 跳躍放鳶等のふし都て害な
 き要遊びなりバ身体を壯健
 するべし勤むればこそ遊び
 樂しけれ故に玩耍を樂ま



ふと思つて學問を務むべし
 寒國に入ては冬天よりれば氷
 の上にて或は走り或は滑走
 して遊ぶなり

第四十二課 女子の玩耍の論

女子の玩耍は童子と異なり
 執九子藏金雞剪公子執交
 加數築毬打熱等の事よく相
 遊む甚だなり故



互不湊あて愉く玩び自分も樂しむ同伴をも
娛まむべきなり

第七篇 乳養動物の論

第四十三課 動物諸類の論

呼吸をして動く者ハ皆動物なり其内次第生
長して大きくなるもの多く又よく物を感ぜる
もの多しとを獸とよく走りまた四足を具へ毛
或は毳ありて其身を蓋ふ鳥はよく飛び毛を具
へて其体を蓋ふ魚ハ翅鰭を具へてよく水を游
べ爬虫や或ハ陸に居り或ハ水に居る蛙鱉龜龍

の類あり小虫類も足六本蜘蛛の類ハ足なき物な

第四十四課 乳養動物の論

凡そ初て生るより乳を以て哺養ふもの此を
乳養動物といふ即ち人獸鯨江豚等の如きもの
皆是なり人ハ二手二足あり獼猴の類も手四
本より足なり獸も多し四足より手なり象
ハ鼻の端小板ありて手の用をなす

第四十五課 家畜の論

人の養ふ獸を名づけず家畜といふ中にも馬ハ

驚駭^{きやうがい}よりて倦^うぐ人の用をつとむる多^{おほく}く健牛^{けんぎう}
 ハ勞力^{らうりき}でよくつとめ牝牛^{めいぎう}の用ハ甚^{おほく}く多^{おほく}く綿羊^{めんやう}
 とよく馴^なてやうやく天^{てん}とよく家^けを守り猫^{ねこ}ハよ
 く鼠^{ねずみ}を捕^とふ子馬^{こば}子牛^{こぎう}子羊^{こやう}子犬^{こけん}子猫^{こねこ}の類も亦^{また}
 ミる玩耍^{わんぎ}をこのむ山羊^{やまや}豚^{ぶた}驢^ろ馬^{うま}も亦^{また}と家畜^{けちく}の
 内^{うち}なり

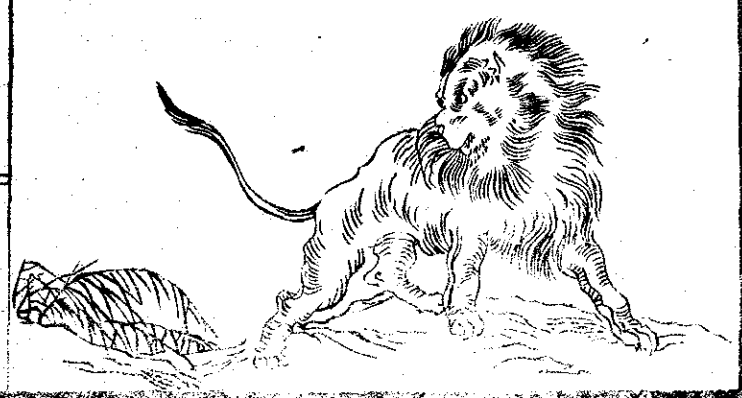
第四十六課 殘殺獸の論

余^よの動物^{どうぶつ}を殺^{ころ}し食^くふものと殘殺獸^{ざんころしけもの}といふ多^{おほく}
 くハ野山^{のやま}に居^ゐるなり其中^{そのうち}に獅^しを最^{もと}も強^{つよ}くとし
 虎^こを殘賊^{ざんぞく}のものとし豹^{ひょう}を猛烈^{めうれつ}きものとし豺狼^{さいまう}

ハよく食^くをむさがるものと
 う狐^{きつね}狸^りハ狡猾^{こうかく}の熊^{くま}ハ勢雄^{しけき}
 なると野猫^{やまねこ}ハ兇暴^{けうぼう}のなり
 此外^{そのほか}物を殺^{ころ}して食^くふ獸^{けもの}の属^{しゆ}
 猶多^{なほおほく}

第四十七課 野獸の論

野獸^{やど}と林木^{りんぼく}曠野^{くわうや}平原^{へいげん}山嶺^{さんれい}の
 間^まに棲^{すま}むるなり其中^{そのうち}に野猪^{やぶち}ハ
 果敢^{てつた}の鹿^かと雅^{みや}きものとあ
 り其外^{そのほか}鬣牛^{えがう}ハ猛殺^{もうころし}の斑驢^{はんろ}



ハ全身黑白の筋あるもの象ハ大なるもの曰大
鹿を力つよくてよく事ヲ耐へ張頸鹿ハ身の
大高く且つ馴やよく羚羊の類を疾走するものな
り是等ハミチを歩くハ希なるものゆて共よ
草菜を食ふの獸なり

第四十八課 其二

狸ハ寂寞を好むもの鬆鼠ハ快捷もの山兎ハ臆
病のものを懸ハ最も小なる者老鼠ハ残害をあ
海狸ハ慧いて精出するもの獼猴をくるるがうはく
よく人を笑ひてむ此等ハミチを草穀物木の實及

び草木の根葉をくらふものなり獸の人の用と
なるハ或は之を食料となり或は衣服の用ふ充
て或は勞役ふつうなり

第四十九課 獸の身を覆ふ物の論

獸の其身ハ具へ衣小代へて体を蔽ふもの各々
同ト一うさるなり綿羊の毛ハ柔く小くて豚の
毛ハ針の如く牛馬駱駝鹿山羊の類ハ其毛をな
髪毛のどく田鼠猫狐狸鬆鼠貂等ハ其皮裘とな
るべく豪猪と蝟とハ毛刺棘の針のどく馬柳鬣
牛ハ頸の毛長くして腰をなす

第五十課

獸類各一異なるの論

猫鼠獅虎をいふ形鬚あり熊の足小ハ掌あり馬
蹄ハ岐を分るハ駱駝の背ハ高き峯の如き肉あ
る豚鯉田鼠ハいふ長き喙あり牛羊鹿山羊ハ
いふ角あり野猪ハ口旁ハ長き牙を出し象ハ長
き牙あり亦板あり

第五十一課

獸の所為と声の論

獸の敵を防いづと守るところの所為ハ
各異なるものなり馬ハ踢リ拘ハ咬み羊ハ額ハ
て抵り牛ハ角ハ觸れ熊ハ抱へる等の如し其

声を發するも各同トウバ獅ハゴウと吼へ
狗ハワンと吠き又ヒヨウと嗥く猫ハニヤアと
叫び悦ぶときハ其声柔らうやてゴコノと
いひ獼猴ハキヤアといひ馬ハヒンといひ羊ハ
バアといひ牛ハモウといふ

第五十二課

獸の動き方の論

獸の動き方も亦各異あるところあり馬ハ行み
或ハ驟リ或ハ馳セ或ハ跑リ大ハ走り亦嗅ぐ物
ををぐね熊ハ獼猴ハ樹を攀躋リ狼ハ跑リ虎
ハ躍リて物を擒リ山羊ハをかきよく跳る

と一獸夜出て食を尋ぬる者ハ昼ハ多ク深林巖
穴の間ニ藏る

第五十三課 獸の居處の論

鼠子老鼠狐狸田鼠等の獸ハ地小穴をほりて居
り鹿猪野兎等ハ林中小草を藉きて卧一鬆鼠猶
振々木の上ニ居り海狸ハ窠を河の旁岸ニおる
る巢を作ると屋の如く獸の卧も處を獸尊とい
ふ

第五十四課 獸各習作何る論

獸齒ひろく鋭く大なるものハ菜草を喰

ひ齒の尖りたる者ハ余の物
を殺し食するなり蟲を喰
ふ獸あり菓を喰ふものハ
至象の身体ハ碩くて重し
故小足も強く太く之を
支へ海牛も身の脇は蒸氣船
の外車の如きものなり
く水を遊ぶ描々足は爪を具
へ又足の裏は軟なりなる胞
ありて行き歩むは音をたて



より

第五十五課

類を以て聚る獸の論

野牛綿羊ハ群を爲して游行且つ食を求め山羊
羴羊ハ高山に居り冬の比ハ幼麋と麋と相聚り
て其保護となる野猪ハ子をひきつゝ其長大
あるを待て後相離る牛ハ敵に攻らるゝ時を
羣をなして互に相保り野狗も羣をなして他の
物を獵り食ふ

第五十六課

人の爲に勞は服する獸の論

人のたゞえよつゝ役ハ服する獸甚多馬
と車と挽き重荷を負ひ亦人ノ騎る小使する
犬とよく夜を守り牡牛も亦荷を負ひ田を耕し
駱駝ハ其性勘忍つゝおもひて熱き沙漠の中
に遠く重きを負ふて行き驢北大鹿象の如きも
亦皆人の役をつとむる物なり

第五十七課

人の食となる獸の論

蹄甲二つに岐れて其性草菜を喰ふを常とて喰
ふて後又草を翻して再び嚼む獸假令ハ牛綿羊
山羊鹿等の如きものハ其肉至つて人の食とな
るよよろし豚熊家兔野兔の如きも亦其肉を食

ふべし獸の子と都く其肉甚ど柔軟なり人又之を食する時も有り

第五十八課 其二

亞墨利加之土人と獼猴の肉を食ひ阿非利加人ハ象獅犀虎河馬の肉を食ひ亞細亞歐羅巴の州内よても或ハ馬の肉を食ふ國も多し有り地球北極の處よてもハ土人好んて鯨膏及び海牛の肉を食ふ

第五十九課

人の衣服よ供する獸の論
綿羊の毛ハ靴下羅襪羅紗を織り獸より有りて其

皮を表となるて上着帽及び手袋等物の作るべきものも多し山羊の毛も獸ハ其毛長し織て各般の衣裳をつくるべし獸の皮ハ其毛を刷去り革となし鞋をはくも有り海狸兔の毛皮も高帽をはくも有り

第六十課

獸の雜用よ給する論

象と海馬との牙多し人の用となり諸般の玩器を作し鍍匠諸獸の大骨を以て鋸箸等を作し獸の角ハ諸々の器に用ひ馬の毛ハ織て褥蓋とあり鯨魚海牛よてもハ燈に用ふる油を製し獸の

角と甲との盾ハ膠とあり其膏ハ蠟燭を製せし

第八篇 鳥の論

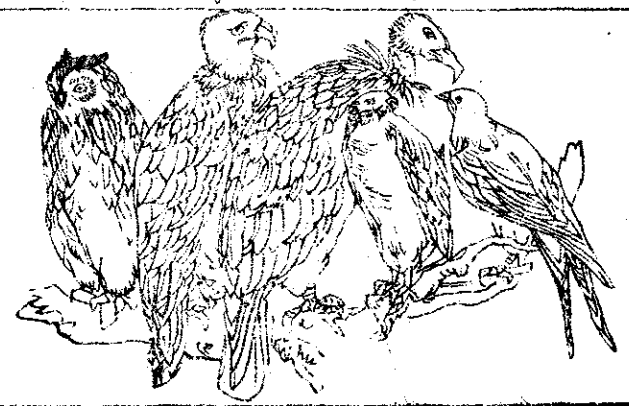
第六十一課 鳥の總論

凡そ生物の蛋より出るものを卵生の動物と名
づく鳥小虫等の類皆然り鳥は嘴羽翼尾足あり
趾は爪あり喉の下に腕腔あり鳥類の中は頭
は冠を具せるものあり鬆髻を具せる者あり地
小行きのあり樹を攀るものあり枝に棲むもの
あり水を遊ぶものあり

第六十二課

鳥の類を異ふる論

鳩鴟鷹鶻の類は生物を捕へ
食ふ啄木鳥鴟鵂ハよく木を
攀つれども地を行ふ便なり
も鶏の類をよく行き走れど
も高く飛ぶとあるも駝鳥
と鴝鵒とハ走る事甚ど速
なり長き脚の鳥ハ多く水澤
を渉り掌ある足の鳥をよく



水を遊ぶなり

第六十三課 鳥の性を異よする論

鳥鴉を羣をとり、巢を構へて同居。鶯鳥雀の類ハ嘴喙硬く、交喙雀ハ松の實を抜く、食ハ燕子ハよく虫を食ひ、啄木鳥ハ喙よて木の皮を敲き、虫の類を驚かし、く搜し、食ハ鴝鳥ハ夜を待つて出て物を捕へ、杜鵑ハ他の鳥の巢よ已が卵をうゑ垂よするなり

第六十四課 其二

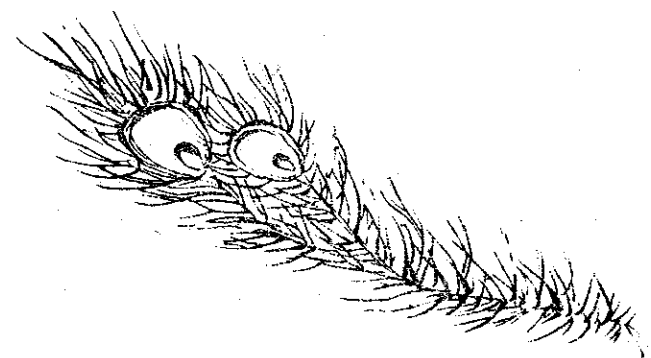
駝鳥を走ると馬の跑るが如く、水を渉る鳥ハ頭

長く、鷄鵲ハ蛇を捕へ、海鷺ハ海鳥の至る大なるもの、神鷹も飛と甚ど疾く、軍艦鳥を走るをも遊ぶとも共よ難く、て飛ぶとと得手と、企鵝も翼小ふく行くと難く、遊ぶと得手とあり

第六十五課

鳥の羽の論

鳥の羽ハ長短大小種々あり



て一様なるは皆軽く柔ふて且つ強し鳥の中
 小麗しき羽のものあり雉山鳥孔雀鸚鵡蜂雀風
 鳥等是なり鳥を毎年其ふるき羽を脱ぎ去り復
 新しき羽を出さざるを毳と云ふなり

第六十六課 鳥の巢の論

鳥は巢を造り産む覆翼して子を出さ其巢
 を造る料一様ならず皆を以てするあり木の枝
 を以てするあり棉草等を以てするもあり小鳥
 の中よハ巢を藩籬よ作るもの其作り方甚だ工
 雅なり燕子ハ簷下よ作り鴛鳥ハ沙の中よ生る

別ハ巢なく鷺ハ高き巖に巢を構へ海鳥ハ濱邊
 の山岸よ造るなり

第六十七課 鳥の聲の論

凡そ鳥々多く音を發する物より其声各同ト
 らに鶏公の聲ハ「コツケコウ」といひ鶏母の聲ハ
 「コ」といひ鶯の聲ハ「ガア」といひ又吹嘘と云
 一又大声を發して叫び家鴨の聲ハ「ギヤ」と
 いひ鳩ハ「ポ」といひ燕の聲ハ「ビ」といふ
 鳥の喜んで鳴るハ百舌畫眉等なり鳥ハ春よ
 當りて始めてよく鳴き出さるなり

第六十八課 鳥の時、隨て地を移る論
時、隨て地を易へ居るを移る鳥なり、燕、杜鵑、鶯の如きは春天此地小到りて秋ハ暖邦は往き冬を去りて又た来る鴻鵠、雁、鴨の如きは秋此地不到り冬を凌ぎ春の暖なる小臨んで又寒邦はゆく地を易ゆる為に往來するは一つなり、大海大地を通りまぐるなり

第六十九課 鳥の人を用いる論

鳥の肉は食ふべきもの甚ど多し、鷄、家鴨、鶩、山鳥、雉、鳩、山麻雀等ハ食物に至るよし、家鴨、鶩、鶩の如

毛と羽ハ牀蓐の内はいるべく、鶩の羽の大なるものも其管を削りて西洋よても筆となし、若し細字を写し或ハ繪を畫く小を老鴉の羽管を用

第九篇 爬虫と魚との論

第七十課 爬虫の論

爬虫と魚と同一く其血紅にして冷なり、鳥獸と同一く歩都て爬虫と山陸は水も居るもの出来るもの多し、其内脚あるものを蟻、蟾、蜥、蜴、鰻、魚、龜等の如きものなり、脚なくして腹行を

居るものハ諸蛇の類あり蛇の中ハ毒あるもの
の心ちうくば

第七十一課

爬虫各異なる處所論

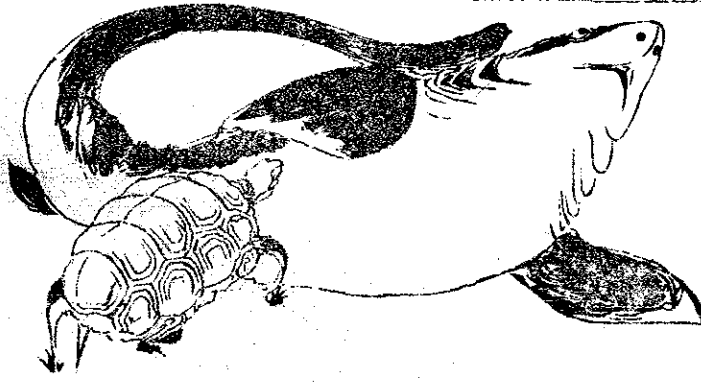
爬虫ハ其皮の光滑なるものあり甲を以て身を
蓋ふものあり其甲も堅固あると楯の如くよく
外を防ぎ内を守る中にも亀の甲も甚ど硬し海
亀ハ玳瑁と名くるものあり甲麗しくして梳簪
等の品を作るべし又脚魚と名くるものあり其
肉甚ど味あり蜥蜴ハ多く性質良きものにて害
をなすものなり蟻と温なるものあり雨の降る後

多く出づ

第七十二課

魚類の論

魚ハ海河溪湖に處るなり身
の皮光滑なるものあり鱗を
以て其身を蔽ふものあり其
骨ハ軟くよく色白し魚ハ
皆を卵を生む一魚の卵を生
むるに其数毎に数千より至
るべし其卵を魚子と云ふ或
は海中或は河中或は泥中



ありてより魚と作る魚類と声なきものあり

第七十三課 人の食とある魚類の論

海魚河魚とも食用となすべし海魚よて人の多く食するものハ鯛方頭魚鰈鱈鯖鮓松魚華臍魚鰻魚等なり河魚よてハ鯉鯽鱖鮠香魚等なり魚類の中よあるて煮ハ至つて食を食するものゆへに挺頭魚鯉沙魚など其うちふく甚しきものなり

第十篇 蟲類別類の論

第七十四課 蟲の論

蟲は六足あり只蜘蛛と蝎といハ八足なり蟲の身ハ頭胸腹の三段に分つ尾は針を持つものあり蜂密蜂木蜂の類はより蟲の平生あるものなり蠅蝶燈蛾甲虫蟻蜂密蜂蠹魚螢蚊等なり

第七十五課 蟲の形ちを變へる論

蟲は其形ちを数度變ずるものなり殊は三次あるものを多しとを初めハ小卵の中より其卵変じて一ツの蠅蟲となり既ハ大かれハ身漸く縮まり硬く變じて蛹となり其後蛹裂て翼ある蟲と出り卵を生じて死するなり

第七十六課 蟲の用ある論

蟲の用あると甚多し蜂ハよく蜜を釀し蠟を結ひ蠶ハよく絲を吐き呀囀虫ハ呀囀米といふ画の具を結び画工漆工の用をふま五倍子も亦蟲の結ぶものにて墨水を作し皂色を染む紫鉚蟲と脂を結びて膠の如く封蠟を作るべし

第七十七課 蛭類貝類の論

此類の物を皆其身質系軟にして或ハ肉にて數箇の環を爲し相比合せて身となり或ハ外に貝殻を具へて骨の代とも蛭と蛭とハ肉の環を合せて身となり蝸牛と牡蠣とハ外に殻を具ゆるものなり此軟質の生物小を陸に居ると水に居るとの別あり蝸牛等の如きを陸に居り牡蠣類の如きを水に住むなり

第七十八課 蛭類貝類の用ある論

蛭ハ土地を穿て行くと土を鬆し又魚を釣るの餌ともなり水蛭ハ醫者の用に入りてよく血を吸ひ墨魚ハ黒汁を生じ其汁を用ひて墨粉を作るべし蠣殻ハ真珠を生じ石決明ともなり鈕を作り又青貝細工は用ひるべし

啓蒙知恵の環卷の一 畢